

氏名	菱ヶ江 惠子		
学位の種類	博士（社会福祉学）		
学位記番号	甲第 69 号		
学位記授与の日付	2019 年 9 月 26 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
学位論文題目	小児がん経験者が小児がん経験者の会へ参加するプロセスに関する探索的研究		
論文審査委員	審査委員長	後藤 隆	（副指導教員）
	審査委員	小原 眞知子	（主指導教員）
	審査委員	大島 巖	
	審査委員	藤岡 孝志	
	審査委員	有村 大士	

題目：小児がん経験者が小児がん経験者の会へ参加するプロセスに関する探索的研究
An explorative study of the Process of Childhood Cancer Survivors
Participate in a Patient Group.

氏名：菱ヶ江 恵子 Keiko Hishigae

要旨：

背景: 治療を終えた小児がん経験者(以下、経験者)には心理社会的課題や晩期合併症の発症リスクなどがある。そのため経験者にとって小児がん経験者の会(以下、会)は情報交換や支え合いができる貴重な社会資源の一つである。そこで経験者の会参加を支援することが大切であり、まずはどのようなプロセスで会参加に至っているのか現状を確認することが必要である。

目的: 本研究の目的は、経験者が会へ参加するプロセスについて探索的に研究し、経験者が会へ円滑に参加できるようにするための方策について提言を行うことである。

方法: 本研究ではインタビュー調査と質問紙調査を実施した。インタビュー調査は会 A を対象とし 10 名の経験者に実施した。その後、会 12 団体のメンバーと、経験者の全国集会の参加者へ質問紙合計 55 部を配布した。インタビュー調査は主に複線経路・等至性モデルの枠組みを用いて経験者が会へ参加する径路を可視化した。質問紙調査はクロス集計、テキストマイニング等により分析した。

結果: インタビュー調査の結果、経験者は会の活動等がわからないことや、病気をした自分と向き合うことが怖いと思うことなどにより参加をためらっていた。しかし他の経験者との情報交換や小児がんの体験の共有・共感を希望するなどして参加に至っていた。また参加に至るプロセスの中には「小児がん経験者としての成長」があることが示唆された。質問紙調査は 35 部を分析対象とした結果、経験者らは入院中も含めてより早い時期に会の存在を知りたかったことが明らかになった。特に、16 歳未満で医療機関に関わる際に医師から会を紹介されると良かったという意見が最も多かった。

結論: 経験者が会へ円滑に参加するには、医師等から会の紹介を行うことが重要と考えられた。また小児がん治療終了後のウェルビーイングの実現のために、小児がん治療の延長線上に会を位置づけ医療機関に会を設置することが必要である。

【Abstract】

An explorative study of the Process of Childhood Cancer Survivors Participate in a Patient Group.

Keiko Hishigae

Background

Improving the cure rate of childhood cancer, there are many childhood cancer survivors (CCS). However, they have some psychosocial issues (for example, difficulty of getting education, job hunting) and onset risks of the late effects. For CCS, patient group is one of social resources to get information and support each other.

Objective

The purpose of this study was to clarify the process of CCS participate in a patient group. And show how we can support CCS to participate patient group smoothly.

Methods

Using Exploratory Sequential design which is one of mixed methods, I conducted interview 10 CCS, one of them is a leader of patient group A and the others are members and questionnaire survey. The targets of questionnaire survey were members of all patient groups of Japan(12 groups) and attendee of meeting including CCS who don't participate patient group. The date of interview was mainly analyzed using Trajectory Equifinality Model (TEM). TEM visualizes a process of CCS participate patient group. And the date of questionnaire survey was analyzed by simple totaling, cross tabulation, text mining and Qualitative Comparative Analysis (QCA).

Results

1) The result of qualitative research

Interview date showed that there are two periods before participate a patient group, which are before know existence of patient groups for CCS (phase I) and after know existence of a patient group(phase II). After CCS knew existence of patient group, some CCS hesitated participation because of some reasons which were they didn't know the member, activities. But, they wanted to get opportunity to talk with other CCS, exchange information, to know that other CCS how feel their cancer and so on. Some of them feel the hope to meet other CCS. Such feeling made them participated. And some CCS had fear facing oneself but overcame and participated the patient group.

2) The result of questionnaire survey

CCS mainly needed to be introduced patient group and informed its information by their doctor. But the data showed that the case of be introduced patient group and informed its information from their doctor was not common. And the data showed that CCS want to know patient group more early timing including be in hospital.

Discussion

CCS can share information of childhood cancer, late effect, measures of problems to participating patient group. So, the participation is useful for their life. And overcoming their fear that facing oneself is growth for CCS. Therefore the process of participate in a patient group including the process of growing as CCS.

Conclusions

In the process which CCS participate the patient group, there was hesitation and hopes. These were struggling with each other. This study indicated that CCS can participate smoothly by supports like giving information from doctor, SW, parents and members of patient group. And to give support for CCS, it's important that patient groups are established in every hospitals which provide treatment for children with cancer.

【審査結果の要旨】

1 審査委員の構成と審査の経過

博士論文審査は、日本社会事業大学大学院学則、同学位規定及び同博士後期課程修了細則に基づき、第3次予備審査及び最終審査から成り立っている。審査委員は、社会福祉学研究科委員会にて選任された大学院担当の専任教員5名が担当した。5名の氏名と専門分野は以下のとおりである。

審査委員長	後藤 隆	社会福祉調査、社会学
審査委員	小原 眞知子	医療福祉、ソーシャルワーク論、高齢者家族支援
審査委員	大島 巖	精神保健福祉 福祉プログラム評価
審査委員	藤岡 孝志	子ども家庭福祉 臨床心理学
審査委員	有村 大士	子ども家庭福祉

2019年5月31日までに提出された第3次予備審査博士論文について、審査委員がそれぞれ精読し、6月15日の公開口述試験を行った。それらの審査を踏まえた各審査委員の指摘事項を審査委員長がとりまとめ、2019年7月26日及び8月19日までの修正を認め、審査委員会は指摘事項に対応した論文の提出を受けて審査を行った。その結果、5名の審査委員全員が合格とし、審査委員会において第3次予備審査の合格が了承された。次いで、9月5日までに最終審査及び最終試験の申請がなされ、審査委員会は、提出された本論文は、博士（社会福祉学）の学位を授与するにふさわしいとの結論に達した。それを踏まえ、審査委員5名連名による「博士論文最終審査及び最終試験結果報告書」が作成され、2019年9月12日の社会福祉学研究科委員会にて審査結果が提案され、了承を得た。

本学学長は、これらの手続きを経て、2019年9月26日に「博士（社会福祉学）」の学位を与えることとした。

2 博士論文の評価

1) 評価視点

本論文は、「学位論文題目」にあるように、「小児がん経験者の会」への「小児がん経験者の「参加」「プロセス」に焦点を当て、事例インタビュー、それをふまえた質問票調査によって、同「プロセス」を構成する諸要因やそれらの間の連関等に係る知見を探り当てることを目的としたものである。

なお、「小児がん経験者」をめぐるのは、調査研究者が適切なサンプリング・フレームを利用できる現状にはなく、したがって、著者自身「小児がん経験者」として、修士論文等これまでの研究や「小児がん経験者の会」関連活動を通じ培ってきた関係者ネットワーク等を活かし、調査研究を進めながら「小児がん経験者の会」に係る「小児がん経験者」の知見を言語化するという、いわばアクションリサーチ的な研究スタイルが採られている。

これは、本論文から得られる諸知見が、著者自身「探索的研究」（「学位論文題目」）と認め

ているように、統計的な有意性を主張しうるプロトコル、すなわちサンプリング・フレーム→サンプリング→集計回答についての検定を採ることができないことを意味しようが、しかし、今後「小児がん経験者」をめぐって調査研究者が適当なサンプリング・フレームを利用できる状況が拓けた場合に上記プロトコルに乗せるべき調査項目を今から用意しておくための研究であることの意義は決して少なくなく、本論文の評価視点はまずこの点に置かれるべきとして、審査委員会の一致したところである。

2) 章別論文概要と評価

本論文は、「序章」「終章」の間に5つの章を配した、全体としては7章立てとなっている。各章の順に概要を紹介する。「序章」では主に、本研究の背景と目的が論じられている。それは、「自分と同じ小児がん経験者と話をしてみたい、相談をしてみたい、体験や情報を共有したいと思ったときに、円滑に同じ小児がん経験者と出会うことができる場（「小児がん経験者の会」）に結びつくことができるようにするために」に集約されている。「第1章」では、セルフヘルプ・グループ論の系譜に日本国内の小児がん経験者の会を位置付けている。「第2章」は、主に国内の関連先行研究サーベイと本論文のよってたつ「理論枠組み」が紹介、解説されている。「第3章」は、本論文の「調査枠組み」として、質的・量的データをともに用いることが説明されている。「第4章」は、既述したように「修士論文等これまでの研究や「小児がん経験者の会」関連活動を通じ培ってきた関係者ネットワーク等を活かし」、著者が選定した「小児がん経験者の会」のリーダー、メンバーへのインタビュー調査であり、得られた逐語録について、アフターコーディング、TEM分析をほどこし、「小児がん経験者が経験者の会に参加する理想的な流れ」と「阻害要因」に係る諸知見を得ている。「第5章」は、「第2章」での関連先行研究サーベイや「第4章」インタビュー調査で得られた諸知見をふまえ、「小児がん経験者ネットワーク」主催の全国集会の機会に配布した質問回答票の内、回収できた36票の集計、分析である。「小児がん経験者の会の情報の理想的な入手方法」等につき、単純集計、クロス集計、自由記述回答部分のKWIC分析、QCA分析等がほどこされている。「調査を通して、小児がん経験者は理想的には中学生～19歳ごろまでに小児がん経験者の会の存在を知り、会へ参加できるとよかった」等、「進学」「就職」等ライフイベントの「タイミング」など、相応の知見を得ている。「終章」では、「終章」以前の内容をまとめたうえで、小児がん治療医療機関での「小児がん経験者の会」「必置」など、今後の政策的支援も論じられている。

以上、章別に論文概要を紹介してきた。審査委員会では一致して、1) 評価視点に既述したとおり、本論文の評価ポイントが、アクションリサーチ的なスタイルを採り、将来検証すべき調査項目に係る知見の発見、整理にあることをふまえ、とくに「第4章」インタビュー調査、「第5章」質問票調査によって、限られた事例からではあるが、「小児がん経験者の会」への「小児がん経験者の「参加」「プロセス」に係る有用な諸知見が得られたことを、認めたところである。

ただ、大きく2つ瑕疵が指摘されたことも記しておかねばならない。一つは、「第2章」、とくにその「理論枠組み」と本論文の「第2章」以降の展開との論理的接続である。「認知理論」

等著者が挙げている「理論」について原典に遡ったより深い理解が必要であることは、審査委員会の共有するところである。もう一つは、「第4章」インタビュー調査、「第5章」質問票調査を通じて、「小児がん経験者」の「小児がん経験者の会」「参加」、しかもその「理想」と「阻害」への注目のために、「小児がん経験者の会」「参加」がいわば強い前提となり、インタビュー・データの中には散見される、小児がん経験者の迷いや苦悩等を含めた、よりダイナミックな「参加」プロセスが背景にひいている点である。この点は、審査委員の中から、「第4章」インタビュー調査データのより慎重な分析を求める意見もみられたところである。

しかし、こうした瑕疵を差し引いても、本論文が、1)評価視点に述べた「アクションリサーチ的なスタイルを採り」「探索的」におこなわれた「将来検証すべき調査項目に係る知見の発見、整理」については、大きく論理的な手続きを踏んだものである点についても、審査委員会として一致をみたものであり、審査委員会一同、本論文を博士（社会福祉学）論文と認めることに決したことを、ここに報告する。

3 最終試験の結果

「2 博士論文の評価」において、審査委員一同博士（社会福祉学）論文と認めることに決したことを承け、日本社会事業大学大学院博士後期課程修了細則第4条（博士論文審査および最終試験）の3並びに別表1 博士論文予備審査および最終審査の「最終試験」の「主な審査項目」に基づき、最終試験合格と判定した。